

卒業論文

「山中峰太郎論 『少年倶楽部』時代を中心に」

早稲田大学 教育学部 国語国文学科

1E18E031-9 小川 燦

## 目次

はじめに

### 第一章 作品の定義をめぐって

- 一．「戦争児童文学」という定義
- 二．「日本児童文学大系」の功罪
- 三．『亜細亜の曙』の無残」ふたたび
- 四．先行研究の確認

### 第二章 作品の考察

- 一．英雄の誕生 ―『我が日東の剣侠児』
- 二．アジアのヒーロー ―『亜細亜の曙』
- 三．新たな脅威 ―『大東の鉄人』
- 四．英雄は帰還したか？ ―『太陽の凱歌』
- 五．『本郷義昭シリーズ』に見る山中作品の特徴

### 第三章 「思想」をめぐって

- 一．山中峯太郎の経歴から
- 二．『民族』と『コタンの娘』
- 三．物語構造に見る山中峯太郎の「アジア観」
- 四．理想と現実の狭間で

おわりに

## はじめに

山中峯太郎は、昭和初期に大衆児童文学界を牽引し、掲載雑誌『少年倶楽部』と共に間違いなく一時代を築いた作家の一人である。にもかかわらず、今日彼の作品はおろか「山中峯太郎」の名前を目にすることも皆無と言っている。明治から大正期にかけて活躍した小川未明や、生前ほぼ無名だった宮沢賢治の作品が児童文学の名作として学校教育の教材としても取り入れられているのとは全く対照的と言っている状況である。

結果として、現在に至るまで山中峯太郎という作家、一連の作品についての横断的な研究は非常に少ない。彼の生涯については、戦後に出版された山中峯太郎自身の手による回顧録的作品『実録アジアの曙 第一部』およびその続刊『実録アジアの曙 第三革命の真相』、もしくは尾崎秀樹氏の『評伝 山中峯太郎 夢いまだ成らず』に頼るほかない。加えて『実録・アジアの曙』は執筆当時から三十年以上前の出来事について描かれたものであり、細部に山中の記憶違いと思われる部分があり、有力な資料とはいえ信憑性に難があるのも事実である。そうした錯誤を詳細に検討し訂正したものとして、前述した尾崎秀樹氏の著作は山中峯太郎という作家について記した唯一の資料と言える。

現在においても、特に学校教育の場において芸術的児童文学の牙城が崩されるには至っていない。山中峯太郎の作品だけに目を向けても、児童文学者らによる評論で取り上げられては「軍国主義的」「侵略的」「国策的」なイデオロギーを纏った作品としてその問題点が列挙され、挙句の果てにはそうした作品が山中自身の侵略的イデオロギーを吐露しているとまで言われる始末である。

しかしそうした捉え方には、いくつかの視点が決定的に不足しているのではないだろうか。第一に同時代的視点、すなわち当時の社会状況が作品の成立と受容に与えた影響である。もちろん現在からすればこれらの作品における多くの問題を指摘することができる。しかし、当時この作品が子供たちのみならず大人をも巻き込んで好評を博したこともまた事実であり、これを無視することはできない。第二に、「作品と作者の同一視」を認めるのか、という点である。作中の登場人物の思想・心情をそのまま作者のそれが吐露されたものとするにはいささか問題があるのではないかと考える。

そこで、本研究では作家山中峯太郎の数ある児童向け作品の中から、『我が日東の剣侠児』『亜細亜の曙』『大東の鉄人』『太陽の凱歌』の四作品を仮に「本郷義昭シリーズ」とし、これらを中心に取り上げる。これらの作品の選定理由としては、主に次の三点が挙げられる。

一・作品の連載時期が「少年倶楽部」が発行部数を大きく伸ばした「黄金期」に重なる。

二・特に『亜細亜の曙』は『敵中横断三百里』と合わせて山中峯太郎の代表作としての呼び声が高く、様々な研究等で比較的语言及されることが多い。

三・一人の作家が連続して同じ人物を主人公に描いた物語であるにもかかわらず、これらを通史として扱った先行研究がみられない。

さて、本論文の構成についてだが、続く第一章では戦後の児童文学者らによるものを中心に、これらの山中峯太郎作品に関する先行研究、評論を参照し、児童文学史上における山中峯太郎と彼の作品の現在の立ち

位置を確認したうえで、それらに対する疑問点等を整理する。第二章では前述した四篇を中心として具体的に作品を内外から検討し、前章における疑問点等に対する回答を行う。第三章ではそれらを踏まえた上で、山中峯太郎の特異な経歴に目を向けつつ、「文化記号論」的視点、特に「周縁世界」としての中国観を念頭に、山中の中国、そしてアジアに対する眼差しを考察し、山中の「思想」に迫る。

なお、本文中におけるこれらの作品からの引用は、『我が日東の剣侠児』及び『亜細亜の曙』については一九七〇（昭和四五）年に講談社より刊行された『愛蔵復刻版少年倶楽部全集』より行う。これは戦前に大日本雄弁会講談社から刊行された当時の単行本を本文のみならず序文や挿絵、巻末の広告など細部に至るまでほぼ忠実に復刻したものであり、「少年倶楽部」掲載時のオリジナルに最も近いものと言ってよいだろう。ただし引用の際には原文を現代仮名遣いに改めることとする。また、『太陽の凱歌』については一九三八（昭和一三）年に発売された当時の単行本（一七版）を入手することができたため、これを用いる。一方で『大東の鉄人』に関しては前述の『愛蔵復刻版』に採録されていないため、一九七六（昭和五一）年にやはり講談社より刊行された「少年倶楽部文庫」版を用いる。こちらにも挿絵等可能な限り戦前のものを再現してはいるが、本文が現代仮名遣いに修正されるなど、『愛蔵復刻版少年倶楽部全集』と比較するとオリジナルから離れてしまっていることをご了承ください。

## 第一章 作品の定義をめぐって

### 一・「戦争児童文学」という定義

山中峯太郎の主な作品についての考察を始める前に、まずは戦後日本の児童文学史上において、これらの作品がどのように読まれ、またどのように位置づけられてきたのか、ひいては作家・山中峯太郎がどのように理解されてきたのかを確認する必要がある。

そこで、本章ではまず戦前のいわゆる「大衆児童文学」、特に「少年倶楽部」誌上で生まれた山中峯太郎の作品たちを中心に戦後の出版状況などを踏まえ、日本の児童文学史が抱える「歪み」や、テキストの改稿、改変をめぐる諸問題を指摘しつつ、児童文学研究者らによって主流となった「読み」とその問題点を明らかにしていくこととする。

さて、戦後日本における児童文学の世界では、長らく山中峯太郎の作品群、ひいては「少年倶楽部」の存在そのものが殆ど無視されてきた。これは「純真無垢な青少年の教育上、戦争を主題とした物語はふさわしくない」とされたからである。

こうした「戦争を主題とした」児童向け文学作品のことを指して、現在では「戦争児童文学」と呼ぶことが多い。この用語、概念が日本において誕生したのは一九六〇年代に入ってからであり、やがて一九七〇年代には児童文学の世界に広く定着した。戦後一〇年余りが経過したこの時期には、松谷みよ子氏による『ふたりのイーダ 直樹とゆう子の物語』（一九六九、講談社）をはじめとする、「直樹とゆう子の物語」シリーズ全五巻や、土屋由岐雄氏による同名の童話をもとにした絵本『かわいそうなぞう』（一九七〇、金の星社）など、現在に至るまで読み継がれる戦争児童文学の「名作」が多く登場している。このような動きの中で生まれ

た「戦争児童文学」という概念は、当初こうした戦後の作品のみを対象として、先のアジア・太平洋戦争を否定し平和を指向する作品であり、「童話は教育的・教訓的であるべき」だとする思想と結びついて、戦争の残酷さ、悲惨さといった負の記憶を子供たちに語り伝えるものとして「反戦的」性格を強く帯びたものとなっていった。

そして、それは結果的に「戦争児童文学Ⅱ反戦的、平和的」といった短絡的な理解を生じ、ある種無意識のうちにその定義から外れる作品（主に戦前期の大衆児童文学）を児童文学の世界そのものから排除することとなった。

その後、鳥越信氏や長谷川潮氏ら児童文学の研究者たちによって日本児童文学史の研究が進展するにしたがって、戦争を主題とした児童向け物語としての「戦争児童文学」の領域は戦前期にまで拡大されたが、この際、先述した「戦争児童文学Ⅱ反戦的、平和的」という従来の定義、概念と衝突し混乱を生じることとなってしまったのである。こうした状況に対し、関口安義氏は「戦争児童文学」という定義を「不注意な命名」としたうえで、一般の文学における「反戦文学」という概念とあわせて「反戦児童文学」もしくは「反戦平和児童文学」とするべきだった、と指摘している（1）。また長谷川氏はさらに踏み込んで、戦前の大衆児童文学が描いた戦争への姿勢を「好戦的」と断じ、「好戦的作品」という言葉まで使っている。

だがここでは山中峯太郎の一連の作品が「好戦的」か否かを論じることはしない。これを考えるためには、まず「好戦的」という言葉を厳密に定義することから始め、山中峯太郎の個々の作品すべてにおいて、作中で用いられた用語やストーリーからその定義に当てはまるか否かを調査するだけではなく、同時期の「少年倶楽部」に連載した他の作家たち

の作品、更には「赤い鳥」や「金の星」など、いわゆる「童話主義」「芸術的児童文学」の世界で描かれた戦争の姿との比較検討も必要になる。さらに言えば、そこまでしたとしても結局は「反戦的」でないにしても「好戦的」とまで言えるだろうか、という客観的な指標を設けることは極めて困難だろう。

つまるところ、戦後に誕生した「戦争児童文学」という定義は極めて曖昧で、不安定なものだと指摘せざるを得ないのである。これは先述した経緯から、そもそも「戦争児童文学」がそうした「好戦的」な作品の存在を想定していないことだけでなく、ここである「戦争」が、どのような形でその作品に関わってくるのか、という問題に関する議論が不十分である点に起因する。

児童文学に限らず、世に出た文学作品には常に「ジャンル」がついて回る。例えば戦国時代や江戸時代など、過去の出来事を題材にすれば「歴史小説」や「時代小説」、未来であればそこにまだ見ぬ科学技術などが登場する「SF小説」であることが多いだろう。一方で、文学作品の「ジャンル」はそうした時代設定、舞台設定によるものだけではない。事件・自己の謎が描かれる「ミステリー小説」や「推理小説」、そこに探偵が登場すれば特に「探偵小説」などと呼ぶこともある。

このように文学作品の「ジャンル」には、物語の時代設定・舞台設定による定義と、物語の主題や主人公の属性などによる定義が混在していることがわかる。例えば「江戸時代を舞台に探偵の主人公が活躍する物語」であれば、「時代小説」ともいえるし「探偵小説」と言ってもよいだろう。無論これらは多義的で、様々なジャンルに横断する作品が殆どであるため、ある一面から見てその作品のジャンルを定義することは極めてナンセンスだ。

このように考えた時、「戦争」というジャンルが極めて曖昧であることがわかるだろう。戦争は「時代」であり、「舞台」であると同時に、物語の「主題」にもなりうるのだ。これは前線の兵士を描くか、それとも銃後の人々を描くか、という違いにもみることができだろう。

いずれにせよ、先述した「反戦的」か「好戦的」か、という小さな問題にとどまらず、また児童文学のみに限らずとも、「戦争文学」という定義づけは、その時点で作品が「戦争」とどのように向き合い、どのように描いたかという問題と衝突してしまう。「反戦的児童文学」および「好戦的児童文学」という言葉が必ずしも適用できないことと合わせて考えた時、こうした定義は避けるべきだろう。

事実、この後第二章で具体的に論じていく山中峯太郎の「本郷義昭シリーズ」にこうした定義を当てはめることには賛同できない。長谷川氏にしても、「戦前の軍国主義の時代に、戦争に関わる物語を描いたのだから、これは好戦的な戦争児童文学である」といったような理解をしているようだが、一連の作品を丁寧に読んでいけば、これらの作品は（いわゆる「軍国的」「愛国的」エッセンスはあるにしても）、むしろ「探偵小説」や「スパイ小説」、もしくは「冒険小説」といった位置づけの方が適切であることがわかるだろう。

だが残念ながら、戦後の児童文学史上で先述した短絡的理解によって「戦争を肯定的に扱った作品」というレッテルを貼られてしまい、それが原因で子供たちから遠ざけられ、やがては忘れられていった。次節からはそんな山中峯太郎の代表作として比較的出版の機会に恵まれた『亜細亜の曙』を中心に、こうした作品が戦後いかに軽視され、無視されてきたかを確認する。

## 二・「日本児童文学大系」の功罪

戦前の日本は、数多くの児童文学雑誌が生まれては消えてゆく、まさに遅れてきた児童文学大国であった。

その起点をどこに置くか、という議論は他に譲るが、少なくとも戦後長らく日本の近代児童文学のスタートは一八九〇年代前後、特に一八九一（明治二四）年の巖谷小波による『こがね丸』とされてきた。こうした戦後日本における児童文学史の「再編」に大きな役割を果たしたと思しき書籍がある。

一九五五（昭和三〇）年に三一書房より刊行された『日本児童文学大系』全六巻（以下、一九七七年より翌年にかけてほるぷ出版より刊行された同名の『日本児童文学大系』全三〇巻と区別するため、「三一書房版『日本児童文学大系』」と呼称する）がそれである。本書は前述したとおり一八九一（明治二四）年の『こがね丸』を起点に、第一巻から第五巻まで、およそ十年単位で二十篇前後の童話や小説、劇の台本などの児童文学作品を収録している。なお最終巻である第六巻は全篇が評論等で構成されており、作品は掲載されていない。他にも各巻には童謡や詩、また評論なども収められており、まさに戦前から戦後まで、日本の主な児童文学を網羅したシリーズと言って差し支えないだろう。だが、各巻の目次を見ながら、その作者や初出について調べていくと、ある疑問が浮かぶ。

第一巻から巖谷小波や小川未明、浜田広介、鈴木三重吉に坪田譲治など、著名な児童文学者が勢ぞろいしている。特に小川未明は第一巻から第五巻まですべてに作品が収録されており、歌劇の台本等を除いた全一〇篇中十篇を占めている。また、作品の初出は雑誌が殆どであり、時代に沿って「少年世界」（一八九五～一九三四）、「赤い鳥」（一九一八～一九二九、一九三一～一九三六）、「金の船（後に「金の星」に改名）」（一

九一九（一九二九）、「童話」（一九二〇（一九二六）など様々な児童文学雑誌が名を連ねている。

しかし、どこを見てもいわゆる大衆児童文学作家、大衆児童文学作品、ひいてはそうした作品を主に掲載した雑誌の名がないのである。さらに言えば、各巻は冒頭に当時の雑誌や単行本の表紙の写真を資料として掲載しているが、ここにも影も形もない。

例えば、山中峯太郎が誌上で活躍し、黄金期にあった一九三〇年代初頭から半ばを見てみよう。『日本児童文学大系』では第三巻にあたるが、副題は「プロレタリア童話から生活童話へ」となっている。その収録作品と初出は次の通りである。

また、続く第四巻では「少国民文学への転向」と題して一九三〇年代後半から一九四〇年代初頭の作品を収めているが、ここにもやはり「少年倶楽部」の作品を見つけない。他にも、山中峯太郎にも

日本児童文学大系 第三巻所収作品の初出

| 作品名       | 作者    | 発表年  | 初出       |
|-----------|-------|------|----------|
| 善太と汽車     | 坪田譲治  | 1927 | 赤い鳥      |
| ある日の鬼ヶ島   | 江口渙   | 1927 | 赤い鳥      |
| 熊とピストル    | 吉田絃二郎 | 1927 | 赤い鳥      |
| 地獄        | 鹿地亘   | 1928 | プロレタリア芸術 |
| ドンドン焼き    | 猪野省三  | 1928 | プロレタリア芸術 |
| 酒屋のワン公    | 小川未明  | 1928 | 童話文学     |
| 水菓子屋の要吉   | 木内高音  | 1928 | 赤い鳥      |
| 文化村を襲った子供 | 槇本楠郎  | 1928 | 戦旗       |
| 手袋        | 水谷まさる | 1928 | 童話文学     |
| 少年        | 酒井朝彦  | 1929 | 童話文学     |
| 仁兵衛学校     | 千葉省三  | 1929 | 童話文学     |

| 作品名         | 作者    | 発表年  | 初出        |
|-------------|-------|------|-----------|
| なぜ？         | ミューレン | 1930 | 少年戦旗      |
| 貨物列車と車掌     | 宮原無花樹 | 1930 | 童話の社会     |
| メーデー        | 千代田愛三 | 1930 | 童話新潮      |
| 鐘           | 小川未明  | 1930 | 童話の社会     |
| くろんぼの子ジミイの話 | 秋田雨雀  | 1930 | 時事新報      |
| 子供の会議       | 塚原健二郎 | 1931 | 赤い鳥       |
| 鬼征伐の桃太郎     | 本庄睦男  | 1931 | 少年戦旗      |
| 青空の下原っぱ     | 小川未明  | 1932 | 単行本       |
| 泣いた赤鬼       | 浜田広介  | 1933 | カシコイ小学二年生 |
| 掃除当番        | 槇本楠郎  | 1933 | 教育論叢      |
| 魔法          | 坪田譲治  | 1935 | 赤い鳥       |

大きな影響を与えたと思われる押川春浪や、山中峯太郎と同時期に「少年倶楽部」で活躍した佐藤紅緑、佐々木邦、高垣眸、吉川英治、大仏次郎に南洋一郎の作品も一切収録されていない。要するに、大衆児童文学、ひいては「少年倶楽部」は戦後日本で児童文学史が戦前、その起源にまで遡って「再編」されるにあたり、完全に無視され、排除されたのである。

この「再編」によって、戦後日本の児童文学は明治時代までさかのぼる「由緒正しい」歴史を持つだけでなく、戦争という断絶を乗り越えた連続性を証明し、その正当性を担保されることになった。

大日本帝国の敗北と、それに伴う戦後秩序の構築過程を、「大日本帝国の去勢」と表現することがある。連合国、特にアメリカの期待に反し戦前の軍国主義が敗北してなお自ら変革を遂げることができず、結局はGHQ、GSのいわゆる「五大改革指令」という強力な外圧を必要とした経緯を鑑みれば、「去勢」という言葉はまさに的を射ているように思える。そんな中、日本の児童文学は自らを「去勢」して見せることで生き残りを図ったのだ。その結果としての大衆児童文学の無視、排除と言えるのではないだろうか。

戦後も生き残った作家たち、小川未明や新美南吉も、戦前・戦中期にはいわゆる好戦的、国策的作品を発表していた。しかし今日、そうした事実が問題になって、作品が排除されることはないだろう。要するに過去と決別して「転向」して見せたのだが、別にその是非を論じようというでもない。詳細は省くが、山中峯太郎自身も戦後は「シャーロックホームズ」シリーズの翻訳、翻案で好評を博している。

だが、三一書房版『日本児童文学大系』の刊行の意味を考えた時、こうした問題は看過できないと思う。なぜなら、『日本児童文学大系』の「刊

行のことば」には次のようにあるからである。

児童文学者は同時に子供の社会的な代弁者として、苦難のたたかいつづけてきたのでした。それなのに、今、日本の児童文学は、子供たちから背を向けられるという深刻な矛盾に直面しています。こどもの心をとらえているのは、漫画・絵物語に代表される通俗的な娯楽読物でありくちびるにうたわれるのは卑俗な流行歌です。むしろまれていく子どもの魂を心配して、両親や教師たちのあいだには、児童文学への高い関心がわき起っています。

（中略）

こうした要請にこたえて、ここに「日本児童文学大系」全六巻を刊行することになりました。日本の児童文学のエッセンスを集めたこの大系には、日本の子どもたちの生活、よろこび、かなしみ、いかり、夢が、それぞれの時代の特色にいろどられながらいきいきと描きだされています。それは子ども自身のものであるとともに、子どもの心の真実にふれたいと思うすべての親、すべての教師のためのものでもあります（2）。

子どもを純真無垢なものとして捉えたうえで、「漫画・絵物語に代表される通俗的な娯楽読物」や「卑俗な流行歌」によって、その純真無垢な子どもの魂が「むしろまれていく」というのである。かつて、一九一八（大正七）年七月に『赤い鳥』創刊号が世に送り出された際、鈴木三重吉は「『赤い鳥』の標榜語（モットー）」と題して、「世俗的な下卑た子どもの読み物を排除して、子どもの純正を保全開発するため」という刊行意図を表明している。つまり、『赤い鳥』創刊からおよそ四十年の月日が流

れてから出版された三一書房版『日本児童文学大系』は、小川未明や鈴木三重吉、また『赤い鳥』に続いた一連の児童文学雑誌が標榜した「芸術的児童文学」、「童心主義」をほとんどそのまま受け継いだものだったと言えるだろう。

大正の時代、『赤い鳥』と共に花開いた「芸術的児童文学」は、しかし昭和の訪れとともに一九二〇年代後半には早くもその幕を閉じることとなった。替わって表舞台に躍り出たのが『少年倶楽部』をはじめとする「大衆児童文学」であった。この歴史的事実を鑑みれば、この三一書房版『日本児童文学大系』には、戦後日本において児童文学史を「再編」するにあたり、目障りな昭和の大衆児童文学を巧みに排除し、無視し、一足飛びに大正時代の芸術的児童文学に連結して「わかりやすく、受け入れやすい」児童文学史を恣意的に編纂しようとする出版社、ひいては当時の日本の児童文学界の企てが見え隠れしているのである。

三一書房版『日本児童文学大系』に収録された物語には、日本の子どもたちの生活や様々な感情が、それぞれの時代の特色にいろどられながらいきいきと描き出されて「いるという」。しかしそれは、民主主義国家の再建を目指す日本の「すべての親、すべての教師」にとって都合のよい物語に書き換えられてしまった。それらを真に「子ども自身のもの」だと考えるならば、子どもたちの心に確かに一時代を築き上げた昭和の大衆児童文学を、そして『少年倶楽部』を無視することはできないのである。

### 三．『亜細亜の曙』の無残」ふたたび

三一書房の『少年小説大系』全三三巻（本巻二七巻、別巻六巻）は、一九八六（昭和六一）年から一九九七（平成九）年にかけて、足掛け十年以上

にわたり刊行された。

それまで、大衆児童文学を取り扱った集成は一九七七(昭和五二)年より翌年にかけて、ほるぷ出版より刊行された『日本児童文学大系』(以下、「ほるぷ出版版『日本児童文学大系』」と呼称)が初めてであり、第三巻に押川春浪、第一九巻に佐藤紅緑と佐々木邦、第二〇巻に山中峯太郎と高垣眸、第二一巻に吉川英治と大佛次郎、第二九巻に南洋一郎や海野十三などの作品が収録されたのが主だったものだった。全三〇巻の中で五巻という比率は、前項で見たようにこれまでほぼ完全に排除され、無視されてきた大衆児童文学によりやく目が向けられるようになってきた一九七〇年代という時代を考えると決して低くはないが、十分とは言えないだろう。

そうした意味も含めて、同じ三一書房から刊行された『少年小説大系』は打って変わって大衆児童文学一色となり、同時に大衆児童文学の体系的集成としては現在に至るまで最初で最後のものとなった。

そんな『少年小説大系』であったが、最終巻が刊行された翌年の一九七八(平成一〇)年、早くも暗雲が立ち込める。長谷川潮氏による『少年小説大系』に慟哭する――その誤ったテキスト改変――は、『少年小説大系』に収録された小説の多くにテキストの改変がみられることを確認したうえで、それらに多くの間違いや恣意的かつ問題のある改変が加えられている、と指摘した。

その中で、長谷川氏は「『亜細亜の曙』の無残」と題し、『少年小説大系第三巻 山中峯太郎集』に収められた『亜細亜の曙』について言及している。

『少年小説大系』におけるテキスト改変を話題にする前に、『亜細亜の曙』のテキストについて整理しておこう。『亜細亜の曙』は「少年倶楽部」

に一九三一（昭和六）年から翌年七月にかけて連載されたのち、単行本としても出版された。この際、単行本化にあたって内容に大きな差異が出ない程度に改変が行われている。そのため、『亜細亜の曙』の本文には、「雑誌連載版」と「単行本版」の二種類があるということになる。例として、雑誌連載版と単行本版の冒頭を比較してみよう。

―惜しまれて散るを櫻の譽かな。散るに潔い櫻の花が、帝都東京の空に、吹雪のごとく風に舞いはじめた。

一方、単行本版の冒頭は次のように書かれている。

惜しまれて散るを櫻の譽かな。潔く散る櫻の花が、帝都東京の空に、吹雪のごとく風に舞いはじめた。

このように微々たる差異だが、裏を返せば最初の一段落を読むだけで、それが雑誌連載版なのか、単行本版なのかが目瞭然なのである。

さて、問題の『少年小説大系』版はその冒頭文から、雑誌連載版を底本としていることが明らかである。しかし、そこには多くの改変が加えられていた。

まず長谷川氏は語句の改変に注目し、「土人」や「食人人種」といった語句を「原地人」としたほか、「支那人」、「支那語」などに含まれる「支那」を「中国」にするといったものが殆どを占めることを確認した。その一方で、例えば「食人人種」は三か所で、また「猿の様な」「猿の如き」という「土人」の形容句も少なくとも一か所で残されているなどのミス、「試験管」が同じページで三回連続「試験官」とされている誤字などを

指摘している。他にも漢字をひらがなに直した結果読みづらくなった箇所、複数使い分けられている漢字を一つに統一してしまった箇所、脱字や一行丸ごとの脱落などを指摘しており、その箇所は「レポート用紙二〇枚を超える」としており、総評として『山中峯太郎集』はこれだけでも欠陥商品と言わざるを得ず、一般の商品だったとしても店頭に出せる品物ではない」、「児童文学研究において、原テキストとの照合なしに『少年小説大系』を利用してはならない」とまで断じている(3)。

それから二〇年、『亜細亜の曙』は単行本として河出書房新社より復刻された。単行本としての出版は一九七〇(昭和四五)年の講談社『愛蔵復刻版少年倶楽部名作全集』以来である。そんな河出書房新社版『亜細亜の曙』は、よりにもよって『少年小説大系』版を底本としていたのである。先述の「試験官」こそ訂正されていたものの、大部分のミスはそのまま引き継がれた。例えば、河出書房新社版『亜細亜の曙』、二六九ページには次のようにある。

月の光はきえて青白く煙幕に長く反射し、その煙幕の各所より滝のごとき煙たれ、落ちては地上の炎にまきあげられて建物の上にうずま  
く。

この文のおかしさにお気づきだろうか。「月の光はきえて」とあるのに、その光が「青白く煙幕に長く反射し」ている、というのである。これでは意味が通らない。が、それもそのはず、本来ならこの部分は次のようになるはずなのである。

月の光は冴えて蒼白く煙幕に長く反射し、その煙幕の各所より瀧の

如き煙垂れ、落ちては地上の炎に巻き上げられて建物の上に渦巻く。

これは『少年小説大系』版にも見られるミスで、「冴えて」のルビ「さえて」を「きえて」に読み間違えたのだろうが、そもそも「冴えて」くらい振り仮名が無くても読めないものだろうか。もっと言えば、一度でも読めば文意が通らないことは明白なのだから、校閲の段階で気づくべきである。また、直後の「青白く」も、本来ならば「蒼白く」とされるべきである。他にも、本文中には「碧」と書いて「あお」と読む表記もあるが、この「青」、「蒼」、「碧」はすべて「青」に統一されている。作者が少しでも活字に情報を込めるべく使い分けているのに、これではその努力も台無しだ。加えて、その改変の意図もわからない。

今回、私は株式会社河出書房新社にメールで連絡し、『亜細亜の曙』担当編集の西口徹氏にいくつかお話を伺うことができた。以下は、その際のやり取りを一問一答形式に改めたものである。

○ 本作を刊行した意図は？

△ 戦前戦中に子供たちの胸を焦がした一冊として注目していた。貴重  
な一時代の証言として抹殺することはできないと思っている。

○ 底本が『少年小説大系』となっているが、なぜか？

△ 安易な選択として、スキャンする際に活字がきれいなものが良いと思った。また、今日的にZQな所が適当に解消されているかもしれない、とも思った。

○ 『少年小説大系』版における問題点は認識していたか？またそのう

えで校正作業を行ったのか？

△. 認識していなかった。また、校正はしているが原本を意識したものではなく、あくまで底本のまま、とした。

突然の申し出に迅速かつ丁寧に対応してくださった西口氏、および河出書房新社には心から感謝したい。そのうえで、西口氏の言葉を踏まえつつ、敢えて言葉を選ばずに河出書房新社版『亜細亜の曙』を評するならば「落第」以外ないだろう。

スキャンという具体的な作業を行うにあたって活字の状態が良い方がスムーズであるのは確かだろうが、それはあまりにも「安易な選択」だ。

長谷川氏は先述の『少年小説大系』に慟哭する」の中で、こうした大衆児童文学を復刻し読者に提供する理由を「それぞれの時代においていかなる作品を読者は読んできたかということを、資料を通じて明らかにすることであるはずだ」としている（4）。全くもってその通りだろう。それだけに「一時代の貴重な証言として抹殺できない」という西口氏の言葉には大いに賛同するが、それならばテキストの異同、改変状況などをしっかりと調査したうえで出版してほしかったと切に思う。

西口氏は河出書房新社版『亜細亜の曙』を「全くもって売れなかった」「重版などとてもとても」とはしていたが、これが現時点では最も手に入りやすい『亜細亜の曙』のテキストであることには間違いない。こうして、誤った改変を加えられた『亜細亜の曙』が再び広く世に出回ってしまった。『亜細亜の曙』の無残」は繰り返されたのである。

なお、今回各版のテキストを調査したところ長谷川氏が指摘していないものもいくつか見受けられた。問題の『少年小説大系』に先立つ一九七五（昭和五〇）年に講談社より出版された「少年倶楽部文庫」版におけ

る改変がそれである。本書は「土人」「食人人種」「支那人」「野蛮地」といった表現はそのまま用いられ、「試験管」も正しく表記されている一方で、「青」や「赤」といった漢字の統一が行われているほか、「月の光はきえて」のミスが存在する。

こうした『亜細亜の曙』におけるテキスト改変とその変遷については非常に興味深く、同時に他の作品にも対象を拡大して研究の対象にし得る重要な問題である。だがこれらは本論の主題ではないため、後ろ髪を引かれる思いではあるが、このあたりで幕引きとしたい。

#### 四・先行研究の確認

さて、第一章ではここまでに「戦争児童文学という定義そのものの曖昧さ」、「戦後日本の児童文学史における大衆児童文学の排除、無視」、「『少年小説大系』および河出書房新社版『亜細亜の曙』におけるテキスト改変の問題」について整理してきた。続く第四節では、こうした状況下にあった、山中峯太郎の主な作品、ひいては山中峯太郎という作家が児童文学研究の世界においてどのように読まれ、またどのように理解されてきたかを確認する。

山中峰太郎の一連の作品の中でも、特に『亜細亜の曙』に関しては彼による大衆児童文学の代表作として、また「少年倶楽部」の黄金期を飾る一作品として、これまでも比較的多くの先行研究、および評論がなされてきた。その中でも典型的な「山中峯太郎理解」と言えるのは以下のようなものであろう。

先にも名前の挙がった長谷川潮氏は、山中峯太郎の作品を巖谷小波の「時局お伽噺」、押川春浪の「武侠小说」の系譜に位置付けたうえで、次のように述べている。

戦争を煽るのも平和を煽るのも時勢次第というのだから、そういう無定見、無責任は批判しなければならない。しかしこのことは逆に、小波らの思想が信念としての侵略主義や軍国主義ではなかったことを意味している。少し後の押川春浪や昭和初期の山中峯太郎らの思想が本質的な意味で侵略的であり、彼らの文学はそういう思想を表明する一つの手段だったのとはいささか事情が異なるのである。

春浪も峯太郎も、武力が平和のため雄ものだとは強調することにおいて、また、アジアの立場において侵略者としての欧米列強を告発することにおいて共通している。(中略)つまり日本は「黄色人種の覇者」なのだから、朝鮮や中国を支配しても当然ということであり、それが春浪や峯太郎の「武侠」だった。日本を盟主とする「大東亜共栄圏」という発想を、早くもここに見ることができる(5)。

また、上笙一郎氏は一九七〇(昭和四五)年に刊行された桃源社版『万国の王城』所収の「解説」にて次のように述べている。

日本の冒険小説は、明治二十年代における矢野竜溪の『浮城物語』から、その伝統に立って明治後期に大活躍をした押川春浪の『海底軍艦』や『東洋武侠団』まで、すべて国家の対アジア政策を反映して侵略主義的な軍事冒険小説とならざるを得なかった。(中略)こうした状況のなかでは、峯太郎が誠意を込めて描いた理想小説も、日本国家の対アジア侵略政策の一環としてたくみに利用され、現実にはそのような役割しか果たすことができない。『亜細亜の曙』の主人公本郷義昭や

『万国の王城』の北条美佐子は、峯太郎が日本とアジア諸国との連帯の「楔」の理想像として想像した青年と少女なのであるが、彼及び彼女は日本国家公認のナショナリストとして、昭和初年代から十年代に生きなくてはならなかったのであった(6)。

さらに、河野孝之氏は長谷川潮氏らも指摘した「日本を盟主とする『大東亜共栄圏』という発想」を日本中心主義としての「括弧つきの『アジア主義』」と呼んだうえで次のように述べている。

それが、中国での革命に尽力した山中峯太郎さえもがなぜ括弧つきの「アジア主義」しか持ち得なかったのか。それは私たち日本人が持ちえた「アジア主義の理念とロマン」が結局、アジアの人々に対する眼差しではなく、豊かな土地としてのアジアに対する眼差しだったからと言えるのかもしれない(7)。

こうした理解が、典型的な「山中峯太郎理解」であり、現在に至っても主流の「読み」でもあると言って差し支えないだろう。概ね一致する点として、次のようなものが挙げられる。

①山中峰太郎の「軍事冒険小説」を一九〇〇(明治三三)年に発表された押川春浪の『海底軍艦』をはじめとするいわゆる「武侠六部作」の系譜にあると位置づけること。

②主に中国大陸、東南アジア諸国を舞台に描かれたこれらの作品において、その舞台設定や本郷義昭ら作中の登場人物が語る理想、思想を「侵略主義的」としたうえで、ごく自然に作者である山中峰太郎

の主義、思想と同一視する点。

③最後に、日本中心の「大東亜共栄圏」的発想、「白人支配からのアジア解放」を謳いながら朝鮮や台湾の人々を無視したこと、などを現代的視点から批判する。

この従来の理解のうち、①に関してはおおむね異論はない。山中自身、「武侠」という言葉を好んで使っている節がある。押川春浪のいう「武侠」と山中峯太郎の「武侠」が、根源的に同一のものかということより、その概念、思想を山中が引き継ぐとしたことにこそ意味があるだろう。私が重大な問題を抱えていると考えるのは、②と③についてである。第一に、山中峯太郎の一連の作品、特に「本郷義昭シリーズ」で描かれるのは戦争そのものではない。むしろ戦争を未然に防ぐために「軍事探偵」本郷義昭が様々な舞台で活躍する、という物語であり、確かに中国大陸や東南アジアを舞台にはするものの、作中においてそれは将来の日本を危機にさらすであろう他国の陰謀を阻止するためのものである、ということとは重要な点である。押川春浪の武侠小説や、平田晋策の『昭和遊撃隊』『新戦艦高千穂』といった日本が海外に進出し新天地を打ち立てる、といったいわゆる「海洋冒険小説」と同列に語り、「侵略的」とみなすのには些か問題があるだろう。

第二に、これは山中峯太郎の作品に限ったものではないが、作中に描かれた登場人物たちが語った主義、思想をそのまま作者の主義、思想と同一視してよいのか、という非常に根源的な疑問である。今日に至るまで、文学研究において作者の生い立ちや執筆当時の心理状況が作品に与える影響は重要な要素として調査の対象になる一方で、作品やその登場人物の主義・主張と作者のそれを同一視ないし関連付けて考えてよいも

のか否か、については様々な議論が行われてきた。しかし、こうした問題に関して一定の結論を導くことは極めて困難だろう。

しかし、こと戦前期の大衆児童文学（いわゆる「好戦的」児童文学）の世界においては、そうした「好戦的」文脈の根源をただ作者に求め、作者ごとその主義、思想をまるごと批判する、といったことがまかり通っていると言わざるを得ない。その実例の一つが先に挙げたようなステレオタイプのな「山中峯太郎理解」と言えるだろう。

一方で、大衆児童文学におけるこうしたステレオタイプのな理解に一石を投じた初期の論文としては、佐藤忠男氏の「少年の理想主義について——『少年倶楽部』の再評価——」（『思想の科学』一九五九年三月号、中央公論社）がある。これは日本児童文学史上において、一九三〇年代当時「実際に少年たちに読まれた物語」としての『少年倶楽部』の重要性を説いたものだ。その中で佐藤氏は「大正の末年から日華事変の頃にかけて、事実上、日本の児童文学の主流は『少年倶楽部』にあった」ことを述べたうえで、「現在発表されている大多数の児童文学史、児童文学論は、この『少年倶楽部』を殆んど問題意識の外にはねとばすことで共通のパターンをもっており、それには一応の理由と主張があるにしても、やはりはつきりと欺瞞的である」と断じた。しかし同時に「歴史的・社会的認識の誤りが、結果としてそれを国家主権思想の宣伝の道具にしてしまったとしても、それはそれなりに誠意をもっておこなわれたものであった」などと、佐藤氏は大衆的児童文学の擁護に専念するあまり、結果として当時の主流に真っ向から反対して反動的に「全面肯定」の姿勢を取ってしまったことには注意したい。

よって、本論では大衆児童文学全般における思想性や、その是非について検討することは避けたいと考える。ここでは作品と作者、作品の「内」

と「外」の関係については慎重に扱いつつ、これまで行われてこなかった「本郷義昭シリーズ」としての読みや、先行研究において殆ど言及されてこなかった『民族』『コタンの娘』といった作品を巻き込んだうえで、「作家・山中峯太郎の思想的根源」について考察していきたいと思う。

## 第二章 各作品の考察

### 一・英雄の誕生 ―『我が日東の剣侠児』

さて、ここからは前章で確認、指摘した山中峯太郎による作品の戦後日本児童文学史上における位置づけ、及びそれらの「読み」に関する諸問題を踏まえた上で、本郷義昭シリーズ各作品の具体的な考察を行っていく。

『我が日東の剣侠児』の連載が『少年倶楽部』誌上で始まったのは一九三〇（昭和五）年、作家山中峯太郎の児童文学界における出世作であり、後に発売された単行本はたちまち十万部を売り上げたという前作『敵中横断三百里』が最終回を迎えた翌月であった。本作は一九三〇年代初頭の児童文学を代表するスーパーヒーロー、本郷義昭のデビュー作であると同時に、児童文学者としての山中峯太郎が早くも第一の転換期を迎えたことを示す作品であるともいえる。

これまで執筆されてきた山中峰太郎の作品は、本作と同時に『敵中横断三百里』単行本版に収録された『弓張嶺月下の夜襲』、『敵の雄将に涙あり』、『殉国の少年間諜』、『砲台地下室の少女』、『熱血の十六少年』及び『白旗高き無戦要塞』など、日清・日露戦争を舞台にした物語や、中国革命における山中峯太郎自身の体験など、「実録的」要素の強い物語が

主流であつた。

それらと比較して、本作は本郷義昭という架空の人物を主人公に据え、あくまで「小説」として書かれている点で区別することができる。当時の「少年倶楽部」では、作品タイトルの前に、その作品の「ジャンル」が添えられている。『敵中横断三百里』においては「事実冒険」や「日露戦争事実物語」など、「事実」であることが強調された。一方、『我が日東の剣侠児』は「冒険小説」であつた。本作の成立過程に関して、前述した単行本版『敵中横断三百里』の序文において、山中峯太郎自身が次のように書いている。

これは小説である。

中にも書いておいたが、『機密間諜部の冒険実記』という米国の本を見た時、これが日本人だったらなお面白く書ける、と思いついて、世界的軍事探偵の日本少佐を、僕が作って書いたのだ。軍事探偵の冒険も、世界を舞台にして、このくらいの偉勲を立てると、かなり愉快だと思う。

ここで彼のいう『機密間諜部の冒険実記』なるアメリカの小説が何であるかは明らかになっていない。しかしここで確認しておきたいのは、本作には（『機密間諜部の冒険実記』とされる）何らかの下地があり、その翻案作品であるということ、主人公は架空の人物であること、の二つである。

ではいよいよ本作の内容に迫っていこう。冒頭、次のようにして主人公が紹介される。

我が日東の祖国に、剣侠児あり。

彼は心も身も偉大な男子である。身長一メートル七十五センチ強（五尺七寸八分）剣道六段、柔道五段、身は武術に鍛えられ、魂は武士道に匂う。しかも、彼の顔は肌白く、眼涼しく、紅顔の美丈夫である。彼は十五の時、陸軍の幼年学校に入った。その時、同級生の僕たちは、皆が、おどろいたのだ。

―これは西洋人の少年が入学したのか？と。

本作は主人公とは幼年学校以来の友人である「僕」による語りで始まる。主人公は士官学校を卒業し、順調に昇進を重ねていたのだが、ある時忽然と姿を消した。そしてその四年後、再び「僕」の前に現れる。この四年間どこで何をしていたのかと「僕」がいくら尋ねても、彼は答えようとしなない。そんな折、「僕」は偶然読んだ『機密間諜部の冒険実記』なるアメリカの小説の主人公がどうも彼のことらしいと気づく。そこで彼を問い詰めると、彼はようやく、第一次世界大戦のさなか、ヨーロッパに派遣された自身の活躍を語り始めるのだ。以降は主人公「己（おれ）」による語りで物語が進行していくことになる。

前述したように、本作は『機密間諜部の冒険実記』なる小説の翻案作品であることを山中峯太郎自身が認めている。それを考えると随分大胆なやり口であるが、同時にシリーズを通して発揮される「虚構と現実の織り交ぜによる現実感の演出」という山中峯太郎の作家としての手法が早くも表れている。

「己」による語りに話を戻そう。まずイギリス軍の総司令部に派遣された彼は、そこで当時の最新兵器である戦車の威力を目の当たりにし、「己も将来の日本陸軍の為に、戦車を研究しておかねばならぬ」と、戦

車への搭乗を頼み込み、そしてたった一度でその構造を頭に叩き込んでしまったという。のみならず、将来の世界各国の運命はその燃料たるガソリン（石油）で決まるということまでもいち早く見抜いてみせるのだ。

その後は「英国軍総司令部付特別軍事探偵」の身分を得て、フランスの港町にある連合国軍のガソリン集積所における連続放火の犯人を追う展開となる。驚くべきことに、逮捕した放火犯の正体は、時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の末子、ヨアヒム皇子であった。そして今度はオーストリアのスパイに変装してヨアヒム皇子を「救出」し、ドイツ軍の奥深くへ潜入してその機密を探り、再び大冒険を経て連合国軍の司令部へ帰還して見せるのである。

ところで、本作の内容を語るうえで、ここまで敢えて「主人公」「彼」と書いてきたのには明確な理由がある。というのも、本作においては前述した通り冒頭で主人公のあらましが紹介されるのだが、その後はほぼ全編を通して「己」で通されており、名は明かされないまま進行する。そして物語は次のようにして幕を閉じるのである。

世界大戦に、かくの如き偉勲を立てた我が日東の剣侠児、彼の本名をここに書こう！即ち『本郷義昭』―剣侠児本郷を有するところは『日本』の誇りである。―読者よ！『本郷義昭』の名を記憶せよ！！

これが一九三〇（昭和五）年の年末号に掲載されるのだから、なんとも強烈な幕引きである。話の続きを毎月毎月待ちわびた当時の少年たちは、このエンディングに心奪われた事だろう。同時に、これは本作が『本郷義昭シリーズ』の第一作である以上に、続く『亜細亜の曙』の序章でしかなかったことを示すものだったのだ。

本作は先述の通り一九三〇年四月から九月にかけて連載された『敵中横断三百里』と、翌年一月からの新連載『亜細亜の曙』との間の三か月に連載された。『亜細亜の曙』の構想がどの時点で出来上がっていたかは定かではない。しかし『本郷義昭シリーズ』としての読みを行うとき、唯一の中編小説であり、かつ唯一「過去」の時間軸を舞台とした物語として、本作は第一章というより、むしろ第〇章と捉えるべきだろう。

「過去」を舞台に「架空の英雄」を活躍させることには二つの意味があった。一つは、日本人にとって幸か不幸か「蚊帳の外」の感があった欧州大戦において、しかし確かに日本人がその勝利に貢献していたのだ、という物語を作り上げ、日本の少年たちの心を鼓舞すること。また一つは、本郷義昭という「架空の英雄」の「架空の英雄譚」を作り上げ、その存在を現実には立ち上がらせることである。

かくして、英雄・本郷義昭は誕生したのだ。

## 二．「アジアのヒーロー」として ― 『亜細亜の曙』

山中峯太郎の代表作と名高い『亜細亜の曙』は一九三一（昭和六）年一月の「新年号」から連載が始まったが、彼にとっても、また「少年倶楽部」にとっても異例の長期連載作品となった。編集部肝いりの長編小説としてスタートした『敵中横断三百里』が一九三〇（昭和五）年四月号から九月号までの六か月、『我が日東の剣侠児』は続く同年十月から十二月までの短期連載だったのに対し、『亜細亜の曙』は年末になっても終わるそぶりが見えず、最終的に翌年の七月まで誌面を飾った。当時の「少年倶楽部」における長期連載は長くても一年、新年号に始まって年末で終わる、というのが通例だったため、まさに異例尽くしだった。

本作は、東京から下関に向かう特別急行列車の車中で、陸軍が小倉に

建設を予定している「大兵器製造所」の図面が、何者かに奪い取られた、という「実に祖国の独立を危うくする絶大の国難事件」が発生したところから始まる。犯人は海路で下関を脱出、一路上海へ向かった。ここで登場するのが本郷義昭である。東京の参謀本部にいる立川少将から暗号指令を受けた彼は、この重要機密奪還のために動き出すのであった。因みに、この「立川少将」は『敵中横断三百里』の主人公「建川中尉」であり、そのモデルとなった建川美次少将(当時)であろう。建川少将は一九三一年当時、陸軍参謀本部の第二部長を務めており、第二部には支那課(第七課)および謀略課(第八課)が設置されていたため、まさに適任だっただろう。

上海で敵を捕らえ損ねた本郷は、早くも超人的活躍を見せる。上海を出港し南へ向かう敵船の舷側にある縄梯子に四時間以上をつかまって台湾海峡を越えるのだ。やがてどことも知れぬ南の島にたどり着いた彼は、「支那人」や「土人」の襲撃を切り抜けつつ、一足先にジャングルに潜んでいたかつての敵、ドイツのクロック將軍と出会う。そして、ここが日本侵略をもくろむ〇国の秘密基地、「巖窟城」であることを知るのだった。やがて巖窟城に潜入した本郷は、「かつてのインド大王の子孫」少年王子ルイカールと出会い、彼のインド独立、アジア解放の悲願に心を打たれる。その後は日本の重要機密そっちのけで、クロック將軍やルイカール、彼の同志であるインド人たちと共に巖窟城の破壊、そして「アジア解放」を目的とした本郷の活躍が始まるのだ。

本作に至って、初めて「アジア解放」の理想がその姿を現す。次のようなルイカールのセリフがそれを象徴している。

「僕等は亜細亜の民だ。世界は類なき皇国日本を、亜細亜の盟主と尊

敬し、勇敢なる日本人を慕う。この強敵巖窟城の全滅を計るは、日本の爲、亜細亜の爲、大インド独立の爲ではないか！」

また、本郷自身も次のように叫ぶ。

彼の黒人と言ひ、この二人と言ひ、皆、亜細亜の民だ。しかも白人の手に囚われ使われて、この義昭の生命に、危害を及ぼそうとする。亜細亜の運命を担える日本帝国の爲に、一死を賭して来れる義昭を、死の手に陥れようとする、哀れなるかな！——思え！大亜細亜の将来を興すものは、日本ではないか！（中略）——日本の爲に……亜細亜の爲に……世界平和の爲に……人類正義の爲に、この巖窟城を、破壊全滅せよ!!!

「ここに見えざる総首領！および十三人の諸君！並びに、その他の幹部と教授諸君！あらためて本郷の声明を聞け！亜細亜は、永遠に亜細亜のものだ。諸君の○国が世界の王者の如く慢ぶり、来って亜細亜の權益を犯さんとする時、敢然として立つものは、諸君の知る如く日本全国民だ。わが日本帝国は、自ら衛り亜細亜を守る!!!この為に、この巖窟全城は、正義の名をもって破壊されねばならぬ。我が帝国を脅かさんとする○国巖窟城に対し、日本人本郷義昭は、今これを宣言す!!!」

しきりに「亜細亜」や「日本」、「正義」が強調される。分かりやすい「アジア解放」の理想、その叫びである。前作、前々作でも「日本の正義」や「日本人の素晴らしさ」といったことは語られてきたが、しかし

これほどストレートに「日本によるアジア解放」、「白人支配からの解放」を本郷が、そして山中が謳ったのはこれが初めてであり、また最後だった。

この時期の山中峯太郎の「アジア観」が良く表れた部分がある。

いかにも支那は国が大きい。そして交通は不便だ。しかも、治める朝廷が、昔から幾代となく変わった。今も現に乱れてる。この為に、同じ支那人でも、生まれた故郷が違うと、外国人のように思う。そこに「国家」を思う心が浅く、「国民」の一致ができず、不幸成るかな、国は大きく人口は多いが、その国は栄えずにいるのだ。インドも、そうだ。前には独立していたが、国内の争い絶えず、そのために衰えて、今は英国の領土になってる。実に恐るべきは国の中の争いだ。

ルイカールをはじめとするインド人と違い、作中の「支那人」はその殆どが巖窟城の白人たちに仕える「敵」であった。しかし、本郷、そして山中はそんな「支那人」に対し、敵愾心よりもむしろ憐れみの目を向けるのであった。

詳しくは後述するが、山中はかつて陸軍のエリートコースを歩みながら、そのキャリアのすべてを投げ打って中国において国民国家を樹立するための革命にその身を投じた。そんな彼のアジア諸国、特に中国に対する眼差しは、深い憐れみと同情であり、それはアジア諸国に対する連帯感、そして彼らを教え導かねばならないというという使命感となって表出したのだ。

前述したような一部分を挙げて、本郷を、そして山中を「アジア解放のオピニオンリーダー」ということはたやすいだろう。だがそれは、『本

郷義昭シリーズ』のほんの一部であり、また山中峯太郎のほんの一部分しか見ていないと言わざるを得ない。この後、更に後続の作品について考察を進めていくが、作品の「外」の事情だけでなく、作中での本郷義昭の描かれ方も、『亜細亜の曙』という作品はとりわけ異質なのである。ともあれ、日本征服、ひいてはアジア征服を目論んだ○国の野望は、本郷やクロック将軍、ルイカールたちの活躍によって巖窟城もろとも崩れ去った。ハワイ諸島の西にあるという巖窟城に次ぐ極秘の「第二根拠地」の在処を掴んだ本郷は、巨大な「自発爆進（ロケット）硬式飛行船・流星号」を奪取し、日本へ凱旋すべく飛び立つのだった。

### 三・新たな脅威 ―『大東の鉄人』

『亜細亜の曙』の連載がちょうど折り返しを迎えた一九三一（昭和六）年九月、満州事変が勃発し、翌年三月には満州国の建国が宣言された。本郷義昭が南洋の巖窟城で活躍を繰り広げる間に、日本とアジアを取り巻く情勢は大きく変化していた。そんな折、『亜細亜の曙』最終回の翌月から早くも『大東の鉄人』の連載が始まった。日本の少年たちを熱狂させた『亜細亜の曙』の続編、そして何より本郷義昭のさらなる活躍に期待が集まったことだろう。

だがいざ連載が始まってみると、「第二根拠地」はおろか、巖窟城も○国の影も形もない。舞台を中国東北部、満州国の西にある興安嶺に移した本作は、日本と満州国、ひいてはアジアの破壊と征服を狙う「日満破壊党」、そしてその背後に潜むユダヤ人秘密結社「シオン同盟」が本作の敵である。

これまでの本郷義昭の敵は、確かに現実根差していた。『我が日東の剣侠児』ではかつての欧州大戦を舞台に、ドイツ帝国やオーストリアⅡ

ハンガリー帝国とその間諜団を相手取り、ついにはドイツ参謀本部にまで潜入したことが連合国勝利の秘訣、ということになっていた。『亜細亜の曙』にしても、「○国」と終始名は伏せられていたが、「英国と最も親密な国」というのだから、これが「米国」であることは明らかである。なお、この点を挙げて山中を「反英米」などとする指摘もあるが、当時、日米の未来戦を描いた物語は宮崎一雨の『日米未来戦』をはじめとする一連の作品や、平田晋作の『昭和遊撃隊』をはじめとして数多く、いわば流行りものであったのだから、これを山中の「思想」と考えるのは、純粹に「文学」として研究するあまりに、これらが第一に商業作品であったという視点を忘れていると言わざるを得ないだろう。

いずれにせよ、「シオン同盟」そして「ユダヤ人」というのは、いかに満州が舞台として日本の少年たちにとってあまりに曖昧で、現実には像を結ぶことのできない「敵」なのであった。そんな「シオン同盟」の首領、赤魔バザロフを相手に、我々が剣侠児、本郷義昭はどのようにして戦うかという、「中国人に変装してバザロフの下へ潜り込む」という代り映えないもので、シリーズ三作目にして「軍事探偵」というジャンルの限界に突き当たった感が否めない。

なにより問題なのは、「鉄人先生」の存在である。彼は昔から興安嶺の奥地、「天祐谷」と呼ばれる秘境に同志たちと潜み、日本を陥れようとする陰謀を防ぐべく活動してきたのだという。そんな「白い巖のような」鉄人先生に対し、本郷は「つつしんで頭を下げ」るのだ。こうして、『大東の鉄人』における本郷義昭は、鉄人先生を筆頭とする組織の一員として動くことになり、これまでのシリーズにおける大立ち回りは鳴りを潜めてしまうのである。

そうして、本郷は高村騎兵中尉や信彦少年といった鉄人先生の同志た

ちと共にバザロフに立ち向かうことになる。また、前作に引き続きクロック將軍とルイカールも登場し本郷と共に戦うのだが、彼らに関してはなぜ満州にいるのか、なぜ二人で行動しているのかなどについてはついに説明されないまま終わってしまう。結果として、『我が日東の剣侠児』そして『亜細亜の曙』において、ほとんど孤立無援のままに大活躍をした姿と比較して、相対的に本郷の活躍は少なく、小さくなってしまい、あくまでも「組織の中のエース」といった立場に収まってしまった。挙句の果てに、これまでどんな状況でも乗り越えてきた本郷が、終盤、バザロフに撃たれ重傷を負い、またその計略によって鉄人先生と同志たちが細菌兵器によって絶体絶命の状況に追い込まれると、あっさりと敗北を予感し絶望の涙を浮かべるのだ。私だけでなく、当時の少年たちも首をかしげたに違いない。「これは本当にあの本郷義昭少佐なのか？」と。実際、連載中の評判も、また単行本の売り上げも芳しくなかったようであるが、むべなるかなといった感がある。

エンディングもあっけなく、バザロフの放った細菌兵器に侵され、もはや救う手立ての亡くなった鉄人先生が、実は日露戦争の際に戦死したと思われた「仁平大隊長」であったことが明かされ、「死してなお興安嶺で国防の任に就く」と遺言する。因みにこの「仁平大隊長」にはモデルが存在すると思われる。日露戦争で第二師団の歩兵第一六連隊第一大隊を率いた「仁平宣旬」少佐がそれであろう。

本郷も重傷を負い、万事休すかと思われた時、本郷は何やら暗号通信を行い、かつて巖窟城から奪った「流星号」で「最新式活人光線機」を届けさせ、一件落着。鉄人先生が「正義に敵するものは必ず滅びる。天の理じゃ」といって『大東の鉄人』は幕を閉じるのだった。

こうした「弱い本郷」像と、それに起因すると思われる「主人公不在

の物語」という諸問題は、一年のブランクを経て連載された次作『太陽の凱歌』にも引き継がれることとなってしまうのだった。

#### 四・英雄は帰還したか？ ―『太陽の凱歌』

山中は一九三〇（昭和五）年の四月に始まった『敵中横断三百里』から、『我が日東の剣侠児』、『亜細亜の曙』、そして一九三三（昭和八）年の年末に『大東の鉄人』が最終回を迎えるまで休みなく作品を書き続けた。特に『我が日東の剣侠児』から登場した本郷少佐はおよそ三年間にわたって『少年倶楽部』の誌面を飾り続けている。しかし『大東の鉄人』完結の後、これまで通りすぐに続編が書かれることはなかった。

一九三四（昭和九）年の新年号から、山中は「軽快小説」と銘打たれた『星の生徒』を一年間連載した。本作は陸軍幼年学校の一年生、一四歳の若林英雄を主人公に、秋山省三や池田茂といったクラスメイト達との生活を描いた作品であり、タイトルの「星」とは陸軍のマークである「星章」の事だろう。山中は軍医であった養父の影響で幼いころから陸軍一筋であり、彼自身一五歳で当時の大阪地方幼年学校（大幼）に入学、一八歳になると大幼を卒業し、東京の陸軍中央幼年学校（中幼）に入学している。そんな彼自身の経験にも深く根差した物語であったと思われる本作は、これまでの作品とは打って変わってどこかコミカルなもので、後年山中がその活躍の舞台を兄弟誌である『少女倶楽部』や『幼年倶楽部』に移してから作品を彷彿とさせる作風だった。これは前作の「失敗」を受けて、山中と本郷義昭に与えられた休養期間であったのではないだろうか。

事実、本郷義昭は『少年倶楽部』に帰還した。一九三五（昭和一〇）年一月から十二月にかけて連載された『太陽の凱歌』は、舞台を日本、東

京に移し、「世界大魔術団」なる劇団を隠れ蓑に暗躍するスパイ集団との戦いを描いた作品である。

本作で重要な位置を占めるのが、日野高明博士である。日野博士は「日野科学研究所」の所長を務め、「強熱紫外線発射機」をはじめとする国防のための秘密兵器を開発していた。その研究を収めたトランクの一つが「世界大魔術団」のスパイに奪われ、それを奪還するために日野博士と一七歳の勇作少年、それに二人の新聞記者らと本郷義昭が立ち向かう、というのが本作のストーリーだ。

だが、本作の本郷義昭もどうにも弱々しい。勇作少年らに対し物腰柔らかで、人の好笑みを浮かべる様は、敵に捕らえられ死刑を宣告されてなお「アジア解放」を訴えた「武侠の英雄」らしからぬ姿だ。加えて、交通事故に見せかけた襲撃でまたもあっけなく重傷を負い、敵に捕らえられるばかりか、脱出にも失敗し、爆薬を仕掛けられたボートに置き去りにされて無残にも殺されてしまうのだった。もはや『亜細亜の曙』の英雄は見る影もない。

だが本郷は生きていた。冒頭から日野博士らと幾度も対決を繰り広げてきた「世界大魔術団」の幹部、支配人カール・ネツテエこそが本郷義昭だというのだ。捕まった本郷も結局は生きていたが、これは日野博士の助手で、本郷の命令で影武者となっていたのだという。

このように、本作終盤ではこうした些か無理のある展開が目立つ。先述のように「世界大魔術団（作中ではいつの間にか『世界大間諜団』に呼称が変わっている）」の支配人は上海で潜入した本郷である一方、もう一人の幹部、団長ジョージ・ミリケンはある巖窟城で本郷と戦った総首領だというのだ。因みに『亜細亜の曙』において、巖窟城の総首領は○国の元太平洋艦隊司令長官、ヤング大提督だとされている。加えて余談だ

が、若き日の山中は「エリザベス・ミリケン」というアメリカ人の女性宣教師と親交があったというが、これは偶然の一致なのだろうか。

ともかく、世界大間諜団の潜水艦「ドルフィン」の艦内で遂に自身の正体を明かし、ミリケンの正体を暴いた本郷はミリケンを下して凱旋するのだが、この展開が全一二章七七節のうち、最後の一節に詰め込まれている、まさに怒涛の展開である。加えて、本来のネツテエはあの「シオン同盟」の重要幹部の一人だというのだから、巖窟城の総首領と合わせて悪役の再利用で、なんとも釈然としない感がある。

先述の通り、前作の失敗が一年越しに引き継がれてしまった点も指摘したい。前作では「日東の剣侠児」本郷義昭少佐の上に「鉄人先生」を据えたことで、本郷は組織の中の一人に落ち着いてしまい、活躍の幅が狭められてしまったことで、主人公としての立場すら危ういものとなっていた。『太陽の凱歌』では、日野博士が科学者の枠を超えて、かつての本郷のごとく大立ち回りを演じること、本郷を脇役に追いやってしまった。それどころか、作中で読者が還ってきた本郷だと信じて疑わなかった男は影武者だった。

『大東の鉄人』と合わせて『太陽の凱歌』は先行研究等において言及が少ないため正確なところはわからないが、単行本が百版、百五十版と版を重ねていった『亜細亜の曙』（8）と比べれば、山中にとって失敗作だったと言っているだろう。本作を最後に、本郷義昭少佐は少年たちの前に再び姿を現すことはなく、山中峯太郎自身も昭和十年代に入ると『少年倶楽部』を事実上引退し、発表の場を『幼年倶楽部』に移していくのだった。

## 五・『本郷義昭シリーズ』に見る山中作品の特徴

さて、第二章ではここまで『少年倶楽部』黄金時代の誌面を飾った四作品を、各作品についてあらすじと特筆すべき点について紹介した。ここからは、それらを主人公本郷義昭の名を借りて、仮に『本郷義昭シリーズ』とした際に、作中にどのような特徴、傾向が見えてくるのかを考察していく。

第一章で確認した通り、山中峯太郎の作品に関する先行研究は少なく、またその多くが代表作である『敵中横断三百里』および『亜細亜の曙』に言及し、その主義、思想を断じるものとなってしまうっており、作中の具体的な表現等にまで踏み込んで言及したものは数えるほどしかない。その中でも注目すべきは、続橋利雄氏による『『少年倶楽部』の小説における物語性の功罪 ―山中峯太郎の少年小説を軸として―』だろう。本論文は『少年倶楽部』、また山中峯太郎の小説が当時人気を博した要因を考察するにあたって、次の三つの視点を挙げている（9）。

- 一・「理想的な男性像」としての本郷義昭
- 二・物語の構成に見られる「危機的状況づくり」
- 三・描写の迫真性

これらについて考える上で、まずはやはり本郷義昭の在り方についてもう一度整理しておく必要があるだろう。山中峯太郎は、戦後のインタビューにおいて自身の生み出した「本郷義昭」というキャラクターについて語っている。その中で、「本郷義昭」という名前は山中の陸軍時代の後輩「本郷義夫」をもじったもののだとしたうえで、次のように語っている。

しかし本郷義昭の内面―思想や性格やは、私が自分でつくり出したものです。子どもは冒険やスリルを愛好するものだから、主人公はなるべく行動的な人物がいいと思ったし、それに日本の少年は、勇気と責任感と行動力を身に付けるように育てられる必要があるというのが私の意見でね、それで本郷義昭はああいう人物になったんです(10)。

彼は同じインタビューの中で「自分の作品を児童文学だと思って書いたことはない」とも語っているが、その言葉とは裏腹に「童話主義」の作家たちや同時期の大衆児童文学作家たちの中で少年たちの求める理想像を最もよく掴んでいたと言える。というのも、当時の『少年倶楽部』に連載された作品の多くは、その主要な読者と同年代の少年を主人公としていた一方で、『本郷義昭シリーズ』をはじめとする『少年倶楽部』黄金時代の山中の作品の殆どは大人たちの物語であり、少年たちはそんな大人を時に助け、時に助けられ成長していく存在として描かれた。こうしたことから、「武侠の英雄」本郷義昭は少年たちにとって「強くてたくましい理想的な男性像」として映ったのであった。

そんな理想の英雄、本郷義昭は実に多彩な顔を持つ男である。第一作『我が日東の剣侠児』で登場した際は、「軍事探偵」としての活躍が描かれた。戦線後方での防諜戦や敵地への潜入などが彼の主任務であり、前線での華々しい英雄譚とは程遠かった。作品の舞台を日清・日露戦争ではなく第一次世界大戦としたことで、地中海での船団護衛等を除けば欧州の戦線に日本が関与しなかった事実がある以上、仕方ない措置だったのかもしれないが、しかし特徴的であった。

顧みれば『敵中横断三百里』も、敵軍の後方へ長駆偵察を行い、日本

軍の勝利に陰ながら貢献した斥候隊の活躍を描いた物語であり、山中の作品はこうした「知られざる戦い」を描いたものが多い、という特徴を指摘することもできるだろう。これによって、作品に描かれた本郷義明の活躍は「あったかもしれない物語」として受容される。そして本郷の「知られざる戦い」は『少年倶楽部』の読者だけのものとなり、大人たちですら知らない、日本が世界に誇る英雄の活躍を自分たちだけでは知っている、という優越感を与えることとなっただろう。

続く『亜細亜の曙』では、本郷は先述の通り「アジア解放」を叫ぶ「ナショナリズムのヒーロー」としての姿を開陳するわけだが、同時に「天才科学者」という要素も付与された。物語の最初のカギとなる「陸軍大兵器製造所」の図面だが、そこで製造されるのがロケットの燃料となる「液体空気」であり、それを開発したのは「隠れたる世界的学者」と協力した本郷義昭だというのだった。因みにその「世界的学者」は「その名を秘す」とされているが、『太陽の凱歌』において本郷と合わせ「日本の脳髓ふたつ」と評されたことを鑑みるに、これは日野高明博士のことではないかと考えられる。当初中国人の海賊に変装して巖窟城に潜入した本郷がその正体を暴かれるきっかけとなったのも、知能テストにおいて検査機械を破壊するほどの結果をたたき出したからであった。――科学による機械の検査は欺き難し！」というのはわざとらしい感もあるが、少年たちを熱狂させる効果としては大きかっただろう。

そして『大東の鉄人』では、鉄人先生や他の軍人たちの登場によって、これまであまり強調されてこなかった「軍人」としての本郷が描かれる。それを表すかの如く、作中では「本郷少佐」「少佐」と呼ばれる機会が多くなっている。

このように本郷義昭というヒーローは、武に優れ、任侠に篤い押川春

浪以来の「武侠の英雄」という姿を受け継ぎつつ、「スパイ」、「科学者」そして「軍人」という三つの顔を併せ持ったヒーローとして少年たちに提示されたのであった。だからこそ、それらすべてが中途半端に終わった『大東の鉄人』や『太陽の凱歌』での本郷は主人公として扱うには活躍不足であり、それが結果的に作品全体を主人公不在の物語として弛緩させてしまっているともいえるのではないだろうか。

第二の視点として続橋氏が挙げている「危機的状況づくり」に代表される構成面の特徴も大きい。本郷はたびたび敵に捕らえられるなどして絶体絶命の危機を迎える。しかしそのすべてを超人的な肉体、天才的な頭脳、強靱な意志や忍耐力、そして何よりも愛国心で乗り越え、そればかりか逆に敵を追い詰めさえする。代表的なシーンとしては次のようなものがあるだろう。『亜細亜の曙』において、巖窟城に潜入した本郷は正体を暴かれ、死刑を宣告される。しかし本郷が先述の「液体空気」の開発者だと知った巖窟城の科学者たちは本郷に死刑の撤回と引き換えの協力を求める。しかし本郷は断固としてそれを拒否しながら、同じく逆に捉えられたルイカールの釈放を求め、更に奪われた機密書類の返還を要求し受諾させるのだった。

他にも、『大東の鉄人』中盤、本郷はやはりシオン同盟の赤魔バザロフに捉えられ、獄中で彼と対峙する。いわば本郷が絶対の劣位である。しかし本郷は堂々たる態度で、次のように述べるのだ。

貴公の才知、貴公の胆略、冷血、決断、すべておしいものだ。正義の日本を敵にすることをやめて、アジアの地を去れ、去って西へ行き、貴公の祖国ユダヤを興せ！亡国ユダヤを、祖先の墳墓の上に、ふたたび興すべきが、貴公のつとめではないか！

これではどちらが囚人かわからない。いつの間にか獄中の本郷がバザロフに対し説教をする、つまり優位に立っているのだ。こうした展開を続橋氏は「優劣関係の逆転とその反復性」と呼んだが、このような構成は他の作品でも見られ、山中作品の特徴と言えるだろう。

第三の「描写の迫真性」とは、作中に描かれた軍事科学の知識の正確性を指したものだ。特に『亜細亜の曙』には、現代で言うミサイルに近い「空雷」や「液体燃料ロケット」、「怪力線」、また『大東の鉄人』には最新鋭の細菌兵器、『太陽の凱歌』では日野博士の発明した「強熱紫外線発射機」や「無声超速射機関砲」、「透明空雷」などが登場する。自身も少年時代に本郷義昭に熱狂したという村松定孝氏は、戦後に山中が語った話として「当時たびたび参謀本部から呼び出しを受け、軍の機密が漏れたのではないかと疑われた」というエピソードを紹介している(二二)。作家としての山中はとうに軍を退いた身ではあったが、そうした最先端の軍事知識には敏感であったのだろう。

続橋氏が指摘したところの「迫真性」だが、特徴的な文章表現もそれを後押ししている。特に目立つのは疑問符、感嘆符の多用による強意表現である。山中の作品には一般的な「！」や「!!」だけでなく、「!!!」までかなりの頻度で用いられる。これは同時期の『少年倶楽部』作品には見られない特徴で、香内三郎氏が「陸軍報告分の簡潔さ」と評した短文傾向と相まって、単純明快、直截的でありながら独特のスピード感、緊張感を物語に与える効果を担っている(12)。

こうした物語の中にちりばめられた様々な軍事・科学の知識を、独特の文章で簡潔に説明することで少年たちの知識欲、好奇心を刺激し、また日本を取り巻く国際情勢、特に満州国など時事的な話題にも触れるこ

とで、「面白くて為になる」ことをモットーとした『少年倶楽部』において、ひとときわ輝く作品として多くの少年たちを虜にしたのだ。

### 第三章 「思想」をめぐって

#### 一・山中峯太郎の経歴から

山中峯太郎は一八八五（明治一八）年に大阪で生まれた。その後陸軍一等軍医、山名恒斎の養子となったことで、軍人の道を歩むこととなり、大阪地方幼年学校、中央幼年学校へと進んだ。一九〇四（明治三七）年十月に席次二番で中幼を繰り上げ卒業、恩賜の銀時計を授与された他、明治天皇に対し御前講義を行った。十二月には陸軍士官学校や第一八期生として入学したが、病氣療養を理由に卒業は一九〇七（明治四〇）年、一九期となった。三年後には陸士一八期、一九期を通じ初の陸大合格者となり、二五期生となった。陸士一八期の卒業生が九二〇名、一九期が一〇六八名に対し、陸大二五期の卒業生は最終的に五五名であったから、いかに狭き門であったかがわかるだろう。

また、中幼時代の同期生には最後の陸軍大臣阿南惟幾、一期上には東条英機がおり、特に東條とは戦中も親交が続いた。阿南の陸相推挙の声に応じて説得を担ったのも山中だという。また、陸士時代の同級生には山下奉文、今村均や本間雅治がいる。『日本陸海軍総合事典』によれば、陸大二五期の卒業生五五名の最終階級は大將が二人、中將が一八人、少將が二五人であり、そのほとんどが将官であったことがわかる(13)。このような、山中は間違いなく陸軍のエリートコースを順調に歩んでおり、仮に軍に残っていれば、戦中は重要なポストを占めたことだろう。

だが士官学校在学中に清国からの留学生と親交を深め、いわゆる「滅

満興漢」のスローガンに共鳴したことで、彼の心は中国にくぎ付けとなった。

「革命」この言葉の鮮烈な感じは、私に初めての新しい驚異的な刺激であった。大多数の頭を上から圧さえている古い因習的なものを、根の下から打ち壊して、そのあとに芽生えるものを自由に育て上げる。古い権威を根こそぎ破壊せずにいられない「革命」というものの痛快な新しい衝動を、私は全身的に感受した(14)。

やがて辛亥革命、続く第二革命がおけると、山中は陸大を退校し中国へ渡った。その後は蒋介石や孫文といった要人と折衝を重ね、特に第三革命時は孫文の参謀役を務めたと語っている(15)。

しかし第三革命は失敗に終わり、失意のうちに帰国。仏教やキリスト教への傾倒を経て、文筆活動を始めるのだった。

## 二．『民族』と『コタンの娘』

こうした経歴がありながら、第一章で確認したように今日では「中国とアジアを侵略の対象として見ていた」とされているのはなぜか。ここには山中の思想の変遷がある。前述の通り第三革命が失敗に終わった時、山中は革命派の要人の日本への亡命を助けたが、かつて彼を突き動かした革命への情熱は冷めきっていた。

「革命」は民族の旧制破壊と新生興隆に奮って献身する、鮮烈に清潔な犠牲的な行動だ、と、七年前から憧れていたのは、勝手に夢を描いていた空想だった。「革命」を目の前に動かしているのは、一に金、

二に金、三も金ではないか。この思いがけない真相が、今夜、痛切に解った。根底からの幻滅だ(16)。

こうして山中は、中国人への連帯感から革命に尽力しつつも、しかし当の中国民衆に裏切られたと考えた。この経験が山中に複雑な対中感情を形成したのだ。

そんな山中の中国に対する、そしてアジアに対する眼差しを理解するうえで重要な作品だと考えるのが、『民族』である。本作は一九四〇(昭和一五)年に陸軍将校の親睦団体「偕行社」の機関誌「偕行社記事」に連載されていたものだ。驚くべきは本作がこうした事情をもちながらも、日本人をアイヌ民族に対する敵、悪役として描いた点だが、この前書きで山中は「自然的現象として、狭い土の上に二本の木が生きて伸びようとする時、どちらかの一本は枯れ、そして他の一本は更に伸びる。生きることが戦いである。(中略)彼らの亡びた素因は、彼ら自身が劣弱性をもっていたからである。大和民族が彼等を亡ぼしたのではない」としつつ、「地上の真理か」と題した作品の最終節で次のように書いた。

―個我に生きて、全的に奉仕的素質を持たない民族は滅びる。

(中略)

―個我に生きずに全体に生きる国民こそ、根柢ある文化を、自己民族の上に、大きく堅く建設する。散りぢりに個人的に安逸に自由に生きてきたアイヌは、何の建設もなしに、完全に碎かれた。

(中略)

印度を滅ぼした者は、英国ではない、国内で相争っている利己的な印度自身だ。安南民族も、ビルマ民族も、インドネシア民族もまた、

自身で滅びたのだ。

今、清国が弱っている。清国を滅ぼす者があるならば、日本か、欧米列国か、否、国民が個我に生きている清国自身だ。

時代、ジャンル、そして想定される読者は違えども他ならぬ山中自身がこのように書いた、という事実は、「作家・山中峯太郎の思想」を論じる上では極めて重要である。にもかかわらず、この点に言及した児童文学研究における先行研究、評論は全くないと言っていいほどである。

山中の「彼等を滅ぼした者は、彼等自身である」という理論は、日本国民にも向けられた。『民族』は戦後の一九四七（昭和二二）年に全面的に改稿のうえ、『コタンの娘』と改題され出版された。その物語全般における日本人の描写の改変等についても重要な点だが、ここではあくまで最終節の記述に注目する。「明日は晴れるか」と改題された最終節、主人公エボシは東京で見た「文明の利器」を認めながらも、次のように叫ぶ。

「それはみんな、西洋人から日本人がもらって、まねをしているものだ。しかし、日本人は威ばっている。うぬぼれて威ばっているものは、おそらく大きく伸びられないだろう。おれたちは日本人の長所にも短所にも、よく気を付けて行かなければならない。」

無論これはいわば戦後の「後知恵」なのだから、こうした記述をもつて「峯太郎は反戦主義だ」などと言い出しては、それこそ一部の作品を挙げて彼を軍国主義者だとあげつらうことと同じだ。だが、これは満州事変に始まる十五年に及ぶ戦争の敗北と、それに伴う大日本帝国の崩壊、軍国主義体制の崩壊という未曾有の大転換を経てなお、山中峯太郎とい

う男の根底にある考え方が変わっていないという何よりの証拠ということができるだろう。

### 三・物語構造に見る山中峯太郎の「アジア観」

では、具体的に山中峯太郎はアジアをどのように見ていたのだろうか。注目したいのが、『亜細亜の曙』等で共通して見られる物語構造である。ここでは古典的な手法として、ユーリー・ロトマンらによる「文化記号論」を参考に、その在り方を探っていく。

ロトマンは、『文学と文化記号論』において、「文化」の特徴を次のように定義した。

文化モデルのもっとも一般的特徴の一つに見なすことができるのは、このモデル内部における基本的境界線の存在である。この基本的境界線は、文化を二つの異なった空間に区分する。文化の空間はこれらの部分内部においてのみ連続的であり、境界線の位置するところでは断絶する。(中略)この場合、「この」世界と「あの」世界の対立は、組織された世界(つまり、「理解できる」、自分の世界)と混乱した(「不可解な」)、よそ者の世界の対立にほかならない。あの世界の住人達は調和を欠き、醜悪なものでなければならない(17)。

つまり「二つの異なった空間」の関係とは「我々」と「彼ら」、すなわち「内部」と「外部」であり、かつ「内部」と「外部」の関係はすなわち「文化」と「野蛮」、「秩序」と「混沌」という二項対立に収束するということだ。こうした二項対立構造は様々な作品において描かれた「正義の日本」、「武侠の日本」と中国、欧米(白人)の対立構造にそのまま適

用することができらるだろう。峯太郎の作品において善と悪の対立は決定的で、本郷や彼の仲間たちが一時とはいえ悪に手を染めることもなければ、巖窟城の総首領も、シオン同盟の赤魔バザロフも決して改心することはない。故に日本人という内部空間から見た時、それらは「不可解」で「醜惡な」、絶対的な敵として理解される。こうした構造は単純明快で、絶対的なヒーローとしての本郷義昭の姿をひとときわ輝かせ、その人気の要因の一つになったことは間違いないだろう。

だが、中国に対する眼差しを読み取るには「内部」と「外部」に加え、もう一つの空間を設定しなければならない。山口昌男氏は第三項として「周縁」という空間を導入し、「中心」と「周縁」という関係に整理した。「周縁」という空間の在り方について、山口氏は「中心はその全体性の不可欠の部分として周縁を（時に排除しながら）維持し、内部を活性化するために時に利用する」と説明した(18)。この「周縁」という概念はロトマン以来の「境界領域」という考え方をより発展させたもので、ただの「線」だった境界に空間的広がりを持たせ、「日常と非日常の出会いの場」としての役割が与えられた。

さて、改めて作品に目を向けると、山中にとって中国という空間、そして中国の人々とは大日本帝国という「内部」と、欧米という「外部」との二項対立の外、まさに第三項としての「周縁」であったことがわかる。第二章でも紹介したように、山中の作品において中国人(支那人)は「絶対的な敵」としての欧米人(白人)、ユダヤ人とは明確に区別されている。

『聞け！支那人諸君！諸君は日本帝国の真精神を未だ知らず、○国に従って妄りに亜細亜の平和を破る。眼ざめよ中華国民！起って日本と

共に亜細亜を守れ！この巖窟城を破壊して、東洋の禍いを除去せよ！』

本郷は『亜細亜の曙』の終盤でこのように叫んだが、これは士官学校時代、自分の妹との結婚を持ちかけた清国の留学生に「おれは日本と中国を結婚させたいんだ」（「聞書・山中峯太郎」）と返した、山中峯太郎自身の叫びでもあっただろう。

山中は当初、「未成」の筆名を用いた。これは孫文の遺書にある「革命なお未だ成功せず」にもみられるもので、辛亥革命以来のものだった。『亜細亜の曙』終盤には「勝利は未だ成らず」と題した節がある。この「未成」の概念こそ、作家・山中峯太郎の源流と言えるだろう。中国革命の夢破れて十年余りがたった後でも、山中の心は中国にあり、また革命にあった。その根底にあったのは「同じアジアに住まう者」としての、中国の民衆に対する同情と連帯感だったのではないだろうか。

「私があの作品で強調したのは、ミリタリズムでも何でもない。そんなところがどこにありますか。フロンティア・スピリットなんですよ(19)。」とは山中自身の談だが、この一言に山中峯太郎の「アジア観」が凝縮されているように思う。士官学校時代に「滅満興漢」に燃える清国の留学生たちと交流し、自身も中国革命に身を投じ、しかしその夢に破れた。その特異な経験こそが、「中国を通してアジアを見る」という山中の国際感覚を醸成したのである。第一章で先行研究について紹介した折、「中国での革命に尽力した山中峯太郎さえもがなぜ括弧つきの「アジア主義」しか持ち得なかったのか(20)」という河野孝之氏の問いを取り上げたが、その答えがここにある。山中にとってアジアとは中国であり、中国とは世界そのものだったのだ。

日本という「内部」、欧米という「外部」に対して「周縁」としての中

国が意識された時、朝鮮や台湾への言及が欠如したことを、同時代的視点から批判することはできないだろう。当時、朝鮮や台湾はあくまでも大日本帝国という秩序の「内部」であり、そうした視点を持ちえなかったことが山中峯太郎の罪だとするのであれば、それは同時に日本国民すべての罪であるべきだ。一人の作家に罪を着せることは、日本の児童文学界、ひいては日本国民すべてが向き合うべき罪過から目をそらすための詭弁でしかないと考える。

#### 四・理想と現実の狭間で

山中峯太郎という男は、理想を追い求めながら現実に裏切られ続けた。陸軍時代はエリートコースを歩んだものの、いわゆる「長州閥」の存在によって出世の道を絶たれ、中国に渡り孫文やかつての同志たちと共に革命に尽力したが、これも志半ばに終わった。

そんな失意の中で文筆活動が続けていた折、『少年倶楽部』誌上に自身の中国での体験を書く機会を得た。さらに当時の陸軍記念日に合わせた企画であった『敵中横断三百里』を執筆する際に日露戦争を戦った軍人たちと言葉を交わし、その体験を物語として連載し、好評を博していく中で、山中の心はかつて失ったはずの「日本と中国の連帯」という夢へと再び向かっていくこととなり、やがて「こうなるはずだった」自身の似姿として、自身の理想を託した英雄として「本郷義昭」を生み出すのだった。

『敵中横断三百里』の連載が始まった一九三〇（昭和五）年から、『太陽の凱歌』の連載が幕を閉じる一九三五（昭和一〇）年までのおよそ六年間は、『少年倶楽部』の黄金期であり、また大衆児童文学の黄金期であった。それに加えて、作家・山中峯太郎、ひいては人間・山中峯太郎のまさに

黄金期であったことだろう。再び燃え上がった若き日の熱情の迸るままに筆を走らせ、そのどれもが少年たちに熱狂と共に迎えられた。

しかし、満を持して「アジア解放」の夢を本郷に叫ばせた『亜細亜の曙』を連載しているさなか、満州事変が起こった。続く満州国の建国など日本を取り巻く国際情勢が風雲急を告げる中、「日本と中国の連帯」という夢は再び破れた。結果として、山中の子供じみた熱情に突き動かされた「フロンティアスピリット」の物語、そして主人公本郷義昭は時代のうねりと共に、大日本帝国が中国大陸、そしてアジアへと侵略の矛先を向けた時、その尖兵として、山中恒がいうところの「汎アジア主義のアジテーション(21)」に利用されたのであった。

山中峯太郎が黄金期を迎えたのは、太平洋戦争のおよそ十年前という時期にあたる。当時『少年倶楽部』の主な読者であった小学校高学年から中学生の少年たちは、十年後、中国大陸で、そしてアジア各地の最前線で戦い、死んでいった世代である。一人の作家の「戦争責任」をここで問うつもりはない。山中峯太郎という男が若き日の自身の熱情を託したのはあくまでも「本郷義昭」という架空の英雄であって、少年たちではない。故に山中は少年を主人公にしなかったのだろう。

だが戦後の児童文学者たちが言うように、仮に山中に罪があるのだとすれば、それは「日本と中国の連帯」という自身の理想をあまりにも無邪気に示して見せたこと、そしてその体現たる本郷義昭が昭和という時代によって少年たちの「扇動」に利用されたという事実に無自覚かつ無批判であったことだろう。

現実が本郷義昭という虚構に、しかし日本による中国、そしてアジアの「侵略」という異なる様相をもって追いついたとき、本郷義昭はその輝きを失った。『太陽の凱歌』を最後に本郷が少年たちの前から姿を消し

た後、一九三八（昭和一三）年の内務省による「児童読物改善ニ関スル指示要綱」を契機に、大衆児童文学そのものが急速にその勢いを失っていく。山中峯太郎と本郷義昭は、その短い黄金期を駆け抜けた、まさにこの時代を象徴する作家であり、英雄であったということができるだろう。

## おわりに

私が山中峯太郎と出会ったのは、父と今は亡き祖父の思い出話をしていくときだった。幼いころの父に祖父が買い与えたのが復刻版の『敵中横断三百里』と『亜細亜の曙』だったという。祖父は一九三一年の生まれだから、いわゆる「ドンピシャ」世代ではないはずだが、それでも思うところがあったのだろうか。そんな、帯がボロボロになった本を片手に研究を始めた。

調査を進めていく中で感じたのは、山中峯太郎という男が、戦前の日本史、そして日中関係を語るうえで欠かせない人物だということだ。彼の経歴を読めば、東条英機や阿南惟幾、孫文や蔣介石といった大物の名前が何度も登場する。にもかかわらず、彼は彼の作品と共にほとんど語られてこなかった。今後、作家としてはもちろん、昭和史における重要人物の一人として、山中峯太郎が注目される日が来ることを期待している。

今回の研究では、仮に「本郷義昭シリーズ」を定めて作品の表現、構成上の特徴等についての考察に重きを置いたが、「本郷義昭」というキャラクターにより焦点を絞った研究も可能だったと反省している。というのも、調査も終盤になって、この本郷義昭をモデルにした、もしくは影

響を受けたであろう作品やキャラクターに出会ったからだ。特に森川久美の漫画『蘇州夜曲』やその続編『南京路に花吹雪』、『Shang-hai 1945』には主人公として本郷義昭が登場するだけでなく、『亜細亜の曙』において彼が用いた変名である「黄子満」の名前を持ったキャラクターまで登場する。また、つい先日放送された『ルパン三世 PART6』の第六話には、「軍事探偵・本郷義昭」が登場した。今からおよそ九〇年前に生まれたかつての英雄本郷義昭と、彼を生み出した山中峯太郎は、長い年月を経て我々の前に今一度その姿を現しつつあるのかもしれない。

今回はこのような個人的な理由から、山中峯太郎一人に焦点を当てた研究となったが、同時代の大衆児童文学作家、作品にはまだまだ見るべきものが多くある。またそれらは今日に至るまで殆ど注目されず、取り上げられてこなかった。

私は「現代を生きる子供たちが戦前期の大衆児童文学を読むべきだ」と言いたいのではない。しかし、太平洋戦争の開戦から八〇年の節目を迎えた今、我々が当時のことを知る手段はますます少なくなっている。そんな中で、こうした題材は当時の子どもたちがその時代をどう生き、何を考えたか、そして十年後の戦争でどのように死んでいったかを知るための第一級の資料となるはずだ。今後、教育の分野等においても、戦前期の大衆児童文学に光が当てられる日が来ることを期待しつつ、筆を擱くこととする。

注

- (1) 日本児童文学会編『日本児童文学事典』（東京書籍、一九八八）
- (2) 菅忠道 等編『日本児童文学大系』（三一書房、一九五五）
- (3) 長谷川潮『少年小説大系』に慟哭する ―その誤ったテキストと改変―、『日本児童文学』第四四卷第一号（日本児童文学者協会、一九九八・二）
- (4) 前出『少年小説大系』に慟哭する ―その誤ったテキストと改変―
- (5) 長谷川潮『児童戦争読み物の近代』（久山社、一九九九）
- (6) 山中峰太郎『万国の王城』（桃源社、一九七〇）所収の上笙一郎による「解説」
- (7) 河野孝之「アジア主義の理念とロマン・伝奇少年小説―『海底軍艦』と『亜細亜の曙』を中心として」、『日本児童文学』第三八卷第三号（一九九二・三）
- (8) 尾崎秀樹『評伝 山中峯太郎 夢いまだ成らず』（中央公論社、一九九五）
- (9) 続橋利雄『『少年倶楽部』の小説における物語性の功罪 ―山中峯太郎の少年小説を軸として―』、『児童文芸』第四三卷第五号（日本児童文芸家協会、一九九七・五）
- (10) 「聞書 山中峯太郎」、『日本読書新聞』（一九六一・五・八）
- (11) 福田清人、山主敏子編『日本児童文芸史』（三省堂、一九八三）所収、村松定孝「昭和前期の大衆児童文芸」
- (12) 山中恒、山本明編『勝ち抜く僕ら少国民 ―少年軍事愛国小説の世界―』（世界思想社、一九八五）所収、香内三郎「亜細亜の「夢」の醒める時」

- (13) 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会、二〇〇五）
- (14) 山中峯太郎『実録アジアの曙 第一部』（文芸春秋新社、一九六二）
- (15) 前出「聞書 山中峯太郎」
- (16) 前出『実録アジアの曙 第一部』
- (17) Yu. ロトマン著、磯谷孝編訳『文学と文化記号論（岩波現代選書二  
三）』（岩波書店、一九七九）
- (18) 山口昌男『文化と両義性（岩波現代文庫）』（岩波書店、二〇〇〇）
- (19) 前出「聞書 山中峯太郎」
- (20) 前出「アジア主義の理念とロマンス・伝奇少年小説―『海底軍艦』と  
『亜細亜の曙』を中心として」
- (21) 山中恒「風雲児山中峯太郎の世界 その見事なアジテーション」、  
『日本読書新聞』（一九六六・六・一三）

① 32 字×25 行＝800 字

② 800 字×53 ページ＝42,400 字